

G-06

核の危険を「飼い慣らす」ラ・アーグ再処理工場の作業員たち : 不確かな危険とともにいかに生きるか

芝宮 尚樹（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 修士課程1年）

人新世と呼ばれる今日の世界を特徴づける事象の一つに、災害があります。気候変動や環境汚染、原発事故、あるいは科学的に発生が予想されている地震や津波などは、21世紀を生きる人類が直面している大きな課題です。例えばここ東京でも、30年以内に70%の確率でマグニチュード7の首都直下地震が起これと予測され、対策を講じることが呼びかけられています。しかし、こうした予測や呼びかけに対して、私たちはそれを自分たちの生活にひきつけてリアルなものとしてイメージすることができているのでしょうか。そこには、頭では理解できてもなかなか腑に落ちないという、不確かさあるいは分からなさといったようなものがあるように思われます。

それでは、このような不確かな危険を取り扱うに際して、私たちはいかなる選択肢をもっているのでしょうか。一つにはリスク・マネジメントと呼ばれる手法があります。危険の不確かさを確率で表されたリスクという数字に還元してコントロールしつくそうとする方法です。はたしてこの方法は、先ほど述べたような不確かさを完全に解消するのでしょうか。一方で、端的に危険を無視するというやり方もあるでしょう。しかし、テレビやインターネットに氾濫する災害の不気味なイメージを、排除することはもはや容易ではないように思われます。おそらく個人としても、そして社会としても必要なことというのは、この二つの選択肢の間、すなわち不確かな危険と「ともに」あるような方法なのではないでしょうか。

そこで今回のポスター発表では、Françoise Zonabend という人類学者がフィールドワークを行なって執筆した『核半島』を参照しながら、こうした不確かな危険とともにあるあり方の一つの例として、ラ・アーグ再処理工場というフランスの原子力施設で働いている作業員たちの実践を分析しました。原子力という目に見えない危険のそばで働き続けている作業員たちが実践しているある種の工夫のようなもの、核の危険を「飼い慣らす」技法は、人新世における重要な学びを提供しているでしょう。

第10回地球研東京セミナー「地球環境と生活文化——人新世における学び」
2018年12月15日 於・東京大学駒場キャンパス

核の危険を「飼い慣らす」ラ・アーグ再処理工場の作業員たち —— 不確かな危険とともにいかに生きるか ——

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース/IHS 修士課程1年 芝宮尚樹

1. 原子力施設で働くということ

『核半島』(1993[1989])

- 仏ラ・アーグ再処理工場の内外で行なったフィールドワークに基づいて、人類学者フランソワーズ・ゾナベントが執筆したエスノグラフィ。
- 1976年から現在にいたるまで稼働。



高度な管理と安全な危険のイメージ

- 管理と制限：放射線に曝される程度による作業者の分類、放射線の強さによる工場内のゾーニング、線量計を携帯する個人による積算線量の管理など
- 安全でシンプル：「原子炉は圧力鍋のようなものです」、「ミネラルウォーターの方が高線量です」といった言葉遣いや、安心感を演出する映像を使った講習。疑問・不安を口ににくい。

危険を「飼い慣らす」(taming)

- ①単語かつ退屈な仕事、②漠然とした恐怖と不安を喚起する核。それらに対処するために、言語的・技術的な、危険を「飼い慣らす」戦術をとる。

① 被曝と汚染の区別

- 被曝 irradiation: 表面的一時的なもので、作業員の「タフさ」と結びつけて考えられ経験される。
- 汚染 contamination: 血肉に染み込むものとして見られ、作業員の腐敗として経験される。

② あえてリスクを犯す

- カミカゼ：許容暴露時間を超過したり、防護措置を取らない。リスクを取ることで男らしさを証明したり、被曝インシデントを話の種にする。
- 金利生活者：あえて手袋を外して仕事をすることで、汚染に対する意識を高める。

③ 罪と罰、そして運命

- 核を扱うことは人事を超えた罪であり、癌などの病気はそれに対する罰である。職業病認定の書類の提出率の低さ。
- 父親たちが鉱山で命を懸けてきた。自分たちが再処理工場でリスクにさらされるのも一族の運命だ。

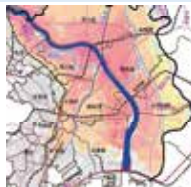
Zonabend, Françoise (1992[1989]) *The Nuclear Peninsula*.
A. Underwood, trans., Cambridge University Press.

2. 身の回りの不確かな危険——荒川氾濫と首都直下地震——

荒川氾濫



荒川下流河川事務所 (2018年12月6日参照)
http://www.ktr-nl.jp/kyo_ab/ktr_content/content_00047193.pdf



首都直下地震

- 70%の確率で、今後30年以内に、M7の地震
- 最悪のケースで、死者2.3万人、経済的損失95兆円

朝日新聞Digital (2018年12月6日参照)
www.asahi.com/spiritual/kyotodoku

来るべき災害の「分からなさ」

- 情報やイメージがあふれ、技術や制度も充実しているが、結局よく「分からない」?

3. 不確かな危険とともに、私たちはどのように生きることができるか?

- 人新世を特徴づける災害を、いかに備え待つか(気候変動、環境汚染、原子力災害、予想される自然災害 etc.)。
- ①客観的な「リスク」に還元してリスク・マネジメントをするのも、②危険を無視して無謀な行為・実践を行うのでもない、③危険を「飼い慣らす」かのような行いはいかにして可能か?
- 何を素材にいかにか(学問)、どのようにイメージと行為を立ち上げることができるか(実践)?
cf. 呪術、災害人類学、『リスクの人類学』(東ほか(編) 2014)、『イメージの人類学』(薗内 2018)、『虚構の「近代」』(ラトゥール 2008[1993])、後期・晩年のミシェル・フーコーの著作など。